

F-25

# 海の学

172  
5  
293

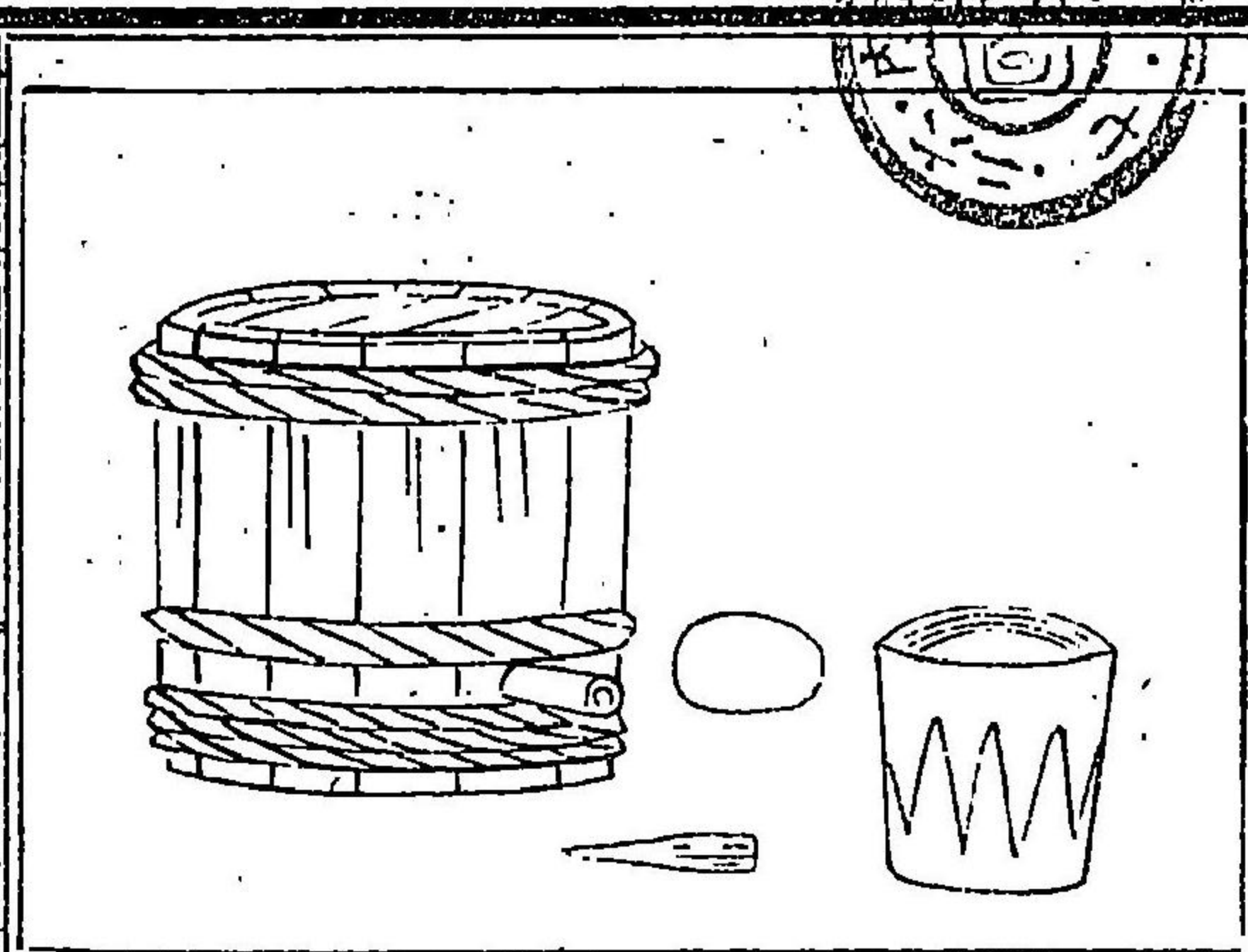






學の海

空氣の話



酒樽に一杯酒を入れて、嘴子を開け、酒は出るよと、若し樽の上に孔を穿ては、酒は忽ち出づ。是他なし、上より空氣の壓す證據あり、又水呑に、水一杯入れ、側より、おれを見れ、水の水より、少しく高く見ゆる、四方の空氣のおすよよる、○空氣は目にも見えず、

萩原藤吉 編輯

法樹書屋出版廣告

小舟小永井八郎先生講義

論語講義

全四册 大牛紙五百 八十五丁 太白系綴 美本正價壹圓廿錢

右は有名なる大家小舟先生が後學生教授の爲に草意(一章の大意)字義(字々の義解)直解(全章の總論)の三項に分ち詳細に説明せられたるものにして、已に各高等學校に於ては倫理部の教科書に採用あり、又教員學力試験にも此書を以て参考とせらる、如きの良書なれば出版者の實言せざるも江湖諸彦の已に了知し賜ふ處の良讀義なり、乞ふ天下の學士幸に愛讀あれ

高橋熊太郎 齋藤真藏 同輯

小學尋常科 普通作文書

全四册 〇第壹卷七錢五厘 〇第二卷九錢 〇第三卷九錢 〇第四卷十一錢五厘

右の小學尋常科 作文教授用の爲に編輯せしもの句〇を記し、第二には假名の短句〇假名交り短句〇口上書類〇を載せ、第三には近易なる假名交り文〇日用書類〇日用電信書類を掲げ、第四には日用書類〇願〇届書類〇及び温習文を載せり、凡て本書は假名の活用を知らしめ、文章を熟せしめん爲に練習問題を附し、法字法を行なわしめて生徒の實力を養成せんことを要する等の目的にて編輯せしものなれば、改

正教科用書には適當の良書なり

第五高等中學校校長野村彦四郎君題字 大日本教育會理事山下部三之介君題字 岩手縣 小學校督業 齋藤真藏編輯

女兒修身範

第一卷 金七錢五厘 第二卷 金八錢 第三卷 金八錢

此書は小學尋常科女子用に適當の爲に編輯せし書にして、女子に最も緊要なる孝悌、慈愛、貞淑の諸言を記し、凡て女子の天性に基き、又は日用の言行に就き、其簡易なるものを編者年來教職に従事し、實験よりして編輯せし者なれば、女子の修身教科用には適當の良書なり

田澤先生校 萩原藤吉君著

泰西習字本

西洋綴 全壹册 用紙極上等 正價金八錢

右は是迄世に有ふれし草紙とは大に其編輯を異にし、草體を習ふ中に至然と講釋體の文字より進んで羅馬字の綴り方を知るの便利なるものなり

教育法令

全壹册 金拾貳錢

此書は勅令、文部省令、訓令を漏れなく蒐集せし者なり



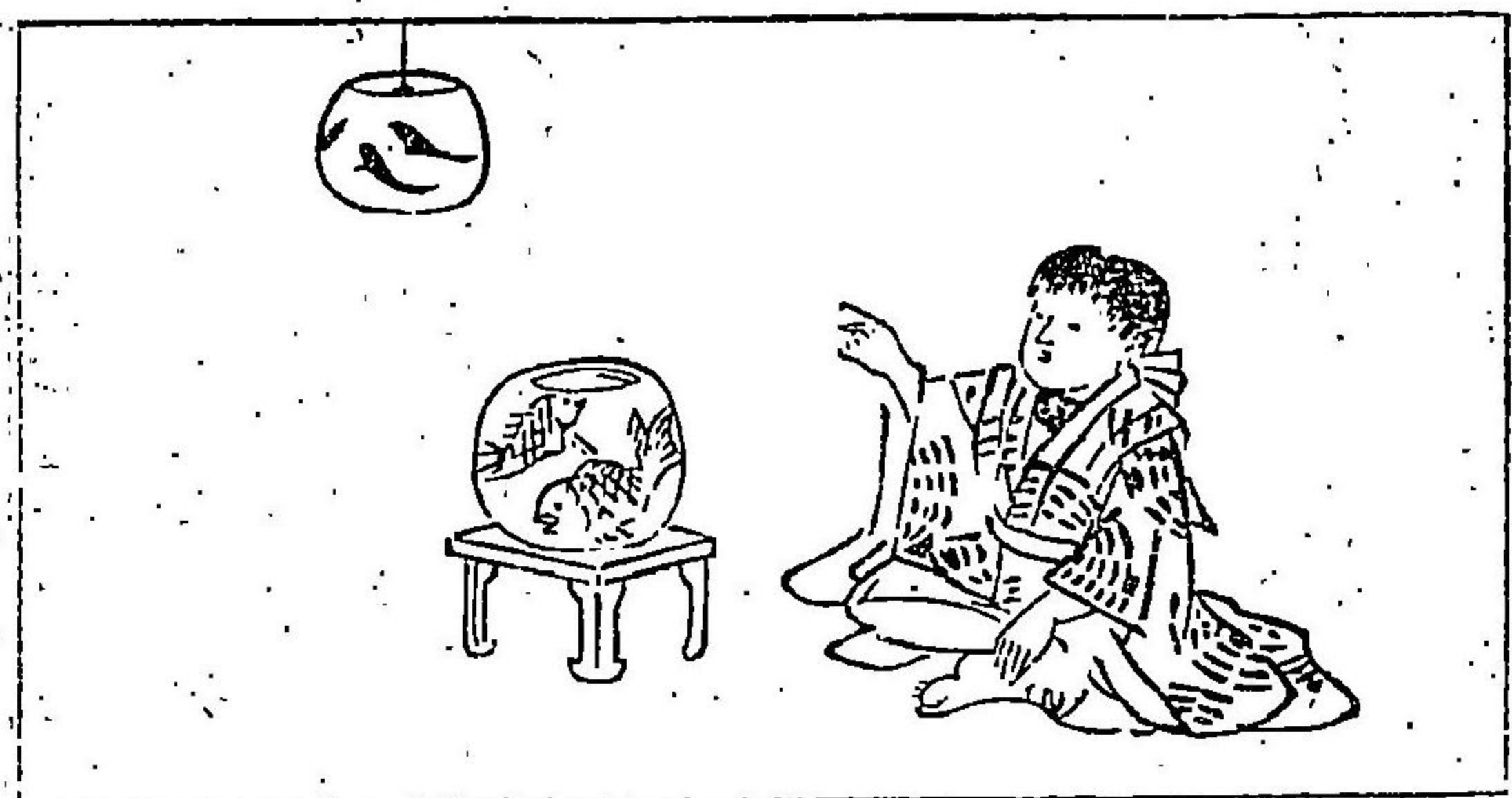
色もなく味もなく臭もなきものなれども内外より壓すの  
 力は甚だ強きものなり、○空氣の世界を圍みて、丁度鶏卵の  
 黄胥を包みたる如くよして、地より高きこと二十里餘に至  
 りて、盡くといふ其重さハ、曲尺一寸四方にして、凡そ十五斤  
 程あり然れども、人常に此力ハ壓れて、その重きを覺えざる  
 ハ、體の内みもまた空氣ありて互に壓し合ふ故あり、○空氣  
 の重さと物を壓す力とを試るに、種々の簡易なる仕方あり、  
 假令は節をぬきたる細き竹の管を取りて、おれを水中に入  
 れ、その中に水を充て、其端をとかと押へたるま、水中より  
 出まれを倒にするも少しも水の出るよしとあし、若し押へ



又空氣は萬物を養ふものにて、人も獸も魚も蟲も木も草  
 も皆おれによりて、生活するを得るなり、

たる指を上げて、止より空氣を管の中  
 に入らむれば、水は下の口より流れ  
 出るなり、是れ水の下の口よりい  
 る、下の空氣におさる、による、又指  
 を放ちて、水の出るは、上より空氣の壓  
 せゆゑに、水ハ其重さによりて出る  
 り、前の酒樽の上にあかを開け、酒の呑  
 口より出ると同理あり、





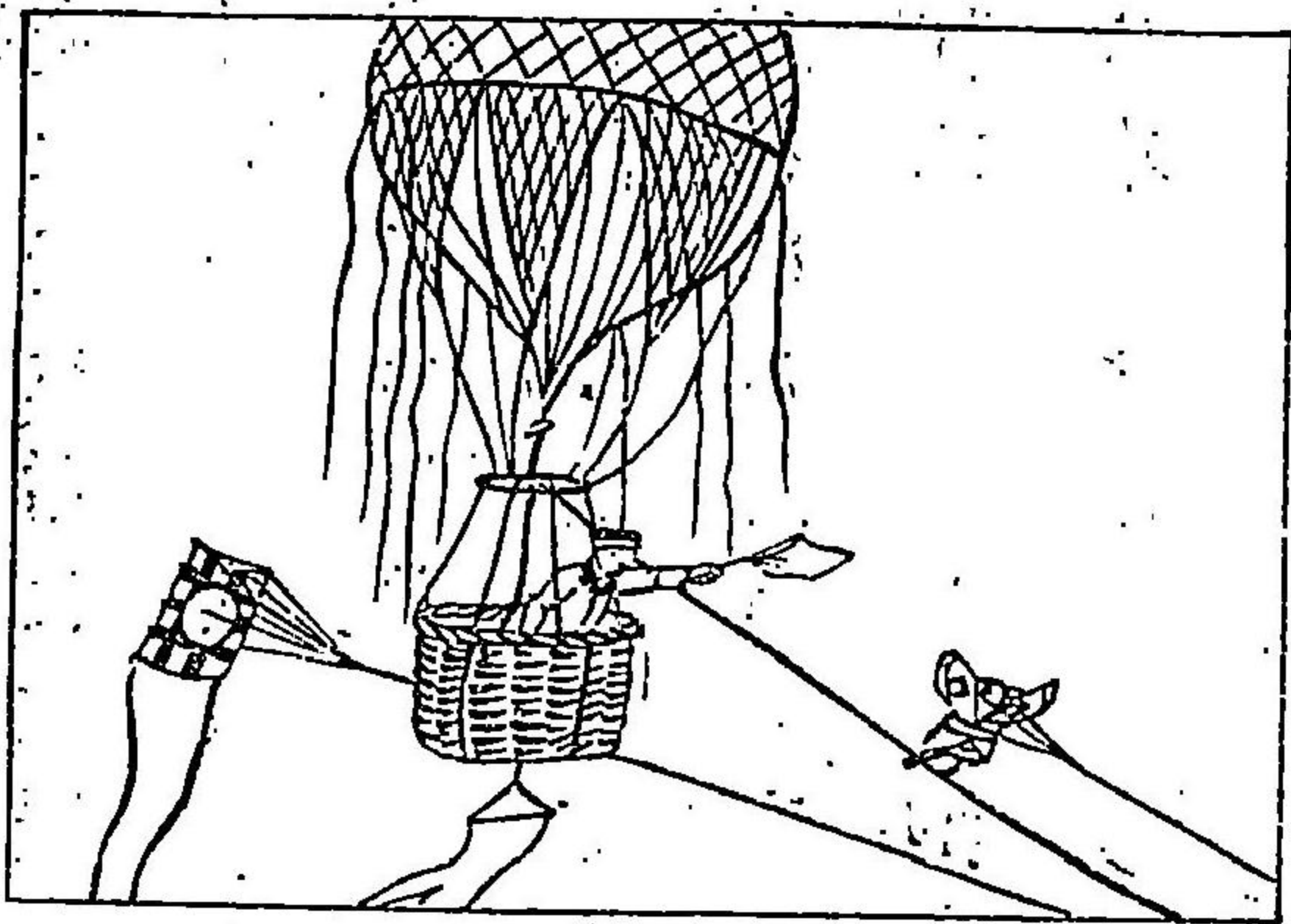
四

○火も空氣なければ、燃ゆることなし、假令は消えが、りたる炭火を煽けは再び熾にある、おれは側の空氣を絶えず送るによるなり、又熾りたる炭火を、火消壺に  
 いる、ときは忽ち消ゆ、おれは空氣の外より、入るを防ぐによるなり、  
 草木の葉より空氣を吸ひ取り、其體を養ふものなる故に、悉く葉を去るときは、枯る、ものなり、  
 水の中にも、空氣を混じて、魚介、藻、昆布な

を養ふあり、故に池中にある魚のよはるときは、水面より浮き、水際にて呼吸するは、新き空氣を多く吸ふためなり、鱗、鰻、鱈などは、常に水底に沈み、棲めども、時々水面に浮びて、呼吸する、これまた空氣を吸ふの爲めあり、  
 ○硝子の錦魚鉢に錦魚をいれ、釣るまで置くとき、時々水面に浮び、口を出して、泡を吐く、空氣を多く吸ふためあり、又鱗をいれるれ、一度の水面に浮び、空氣を吸ひ、底に沈むとき、肛門より細かき泡を出すは、鱗の新らしき空氣を吸ひて、古き空氣を出すあり

風船の話





高く昇る、是皆空氣より輕き故押し上げらるゝによる、  
 風船は球氈の理により、護謨の袋に水素といふ輕き瓦斯を充て、下

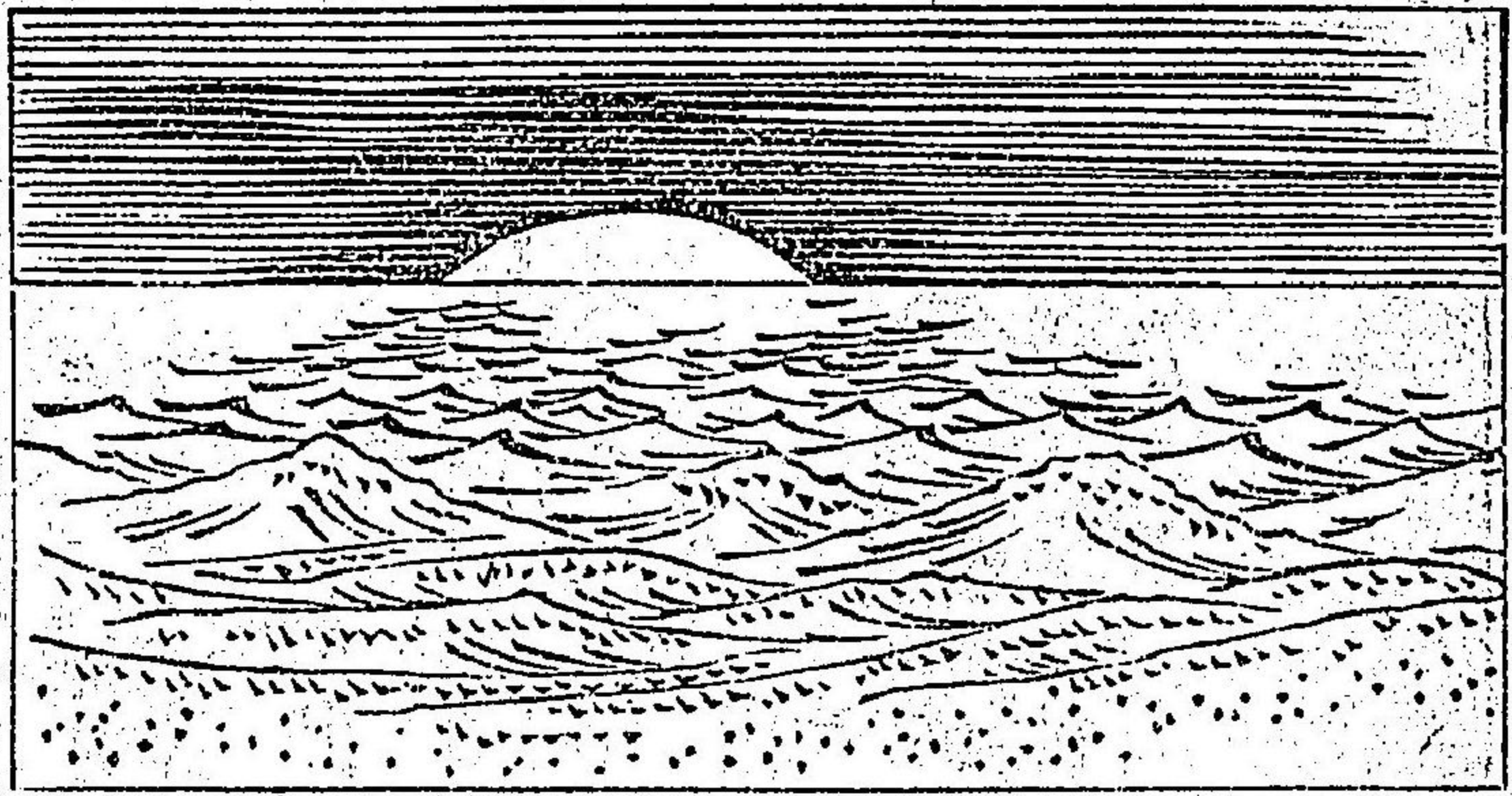
空氣は前にもいふ如く物を上下左右  
 に押すの力あるものなるにより、空氣  
 より輕きものハ必ず昇るものなり、  
 ○風ハ空氣の動くものなるにより、氈  
 は風の向きに従ひ下より押し上げら  
 るゝあり、又球氈といふものあり、薄き  
 護謨の袋に水素といふ輕き瓦斯を充  
 し、これに絲をつなぎ、放つときは忽ち

に籠を附け、これに乗り、空中に昇り、四方に乗り廻ることを  
 得るあり

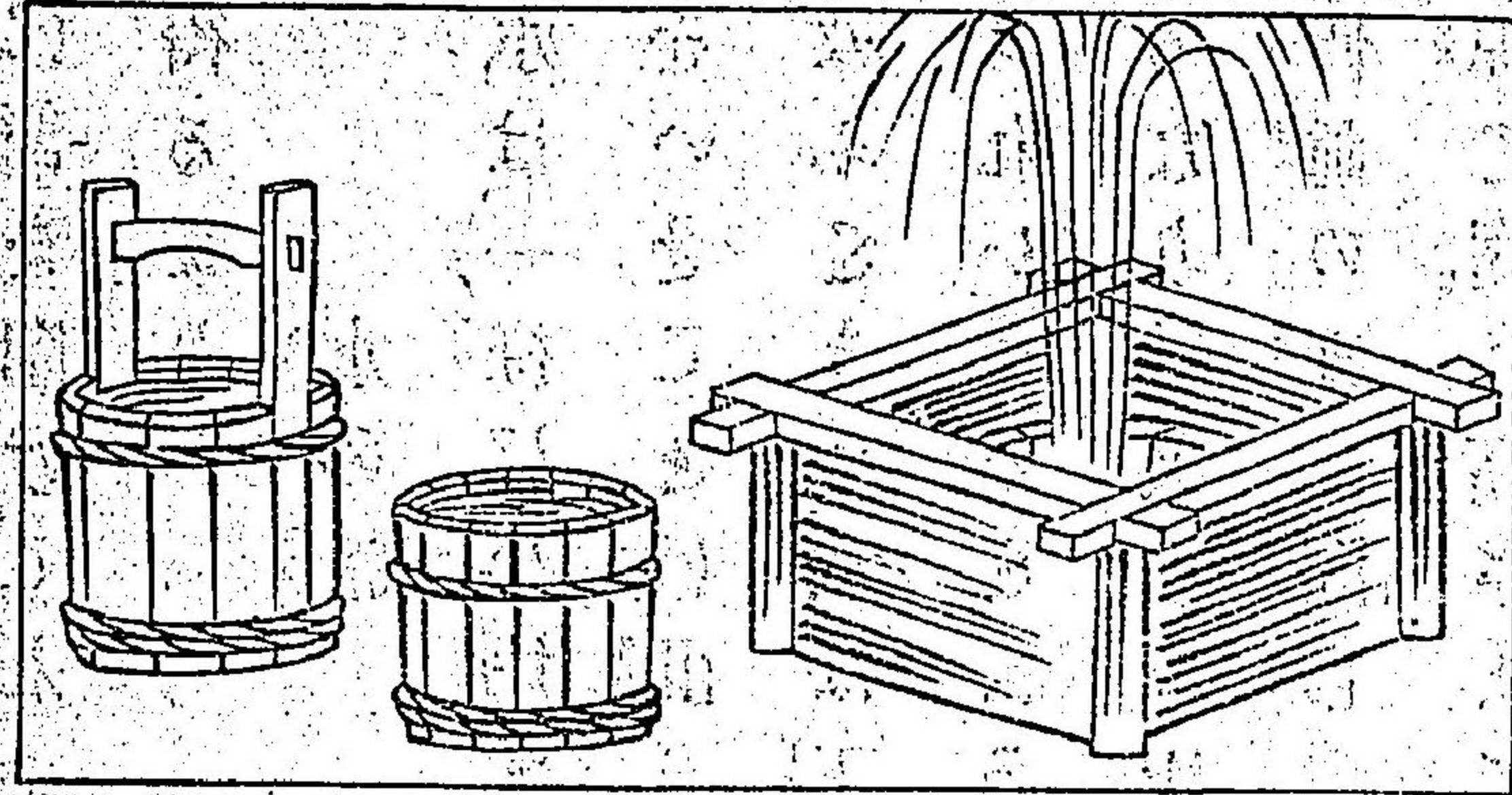
水の話

水は一樣に平均するの性質あるものにて、假令は桶に水  
 をいそごきに曲りたる硝子の吹上げ管をかけ、少く之を  
 吸ふとき、水は下の口より出で、桶の水面の高さに上る  
 おれ、いつるとおろの水は桶にある水の源と平均するに因  
 るなり、○又噴き出し、水掘抜井戸、天然の噴出、泉の如きも  
 皆前の理に同じ、○高き處より、水を樋にて引けば、其水は、水  
 源と同じ高さまで、噴き出せるものなり、上圖の如し、





分れ離るゝおとなきなり、  
 潮の満乾の話  
 潮の満つるといふは、元月と日の引く力  
 に基くものにて、地球よりは月に近く  
 して、日に遠きゆゑ、月の引力強きを以て、  
 地球が月の下を運るときに、海水は引か  
 れて、一日お一回生ずるあり、然れども、一  
 日に二回あるものは、月が反對する海の  
 水は自ら残り集るに由るなり、○日と月  
 と力を合せて引くを大潮といひ、新月と



又水の軽きものを浮べ、重きものを沈む  
 るは、何ゆゑぞと尋ぬるに、水の上下左右  
 に物を壓せ力ありて、已れより軽きもの  
 をうかべ、重きもの沈む、然れども地上  
 にては、動かすがたき物も水中にては、た  
 やすく轉はずとを得るは、水に壓す力  
 あるがためなり、  
 水の又互に相引くの性あるものにて、  
 流るゝとき、かならず連あり、止まれは、  
 何より來るも、かならず相集り、決して





満月の頃つげにあり、又日ひと月つきと力を分わかちて引ひくときを小潮こしほといふ、上弦月かみづき、下弦月したづきの頃ころにあるなり、○潮しほの満干みちかの六時十五分むじゅうごふん間に終おる故ゆゑに一晝夜ちゆうや二回宛にわいとなるなり、

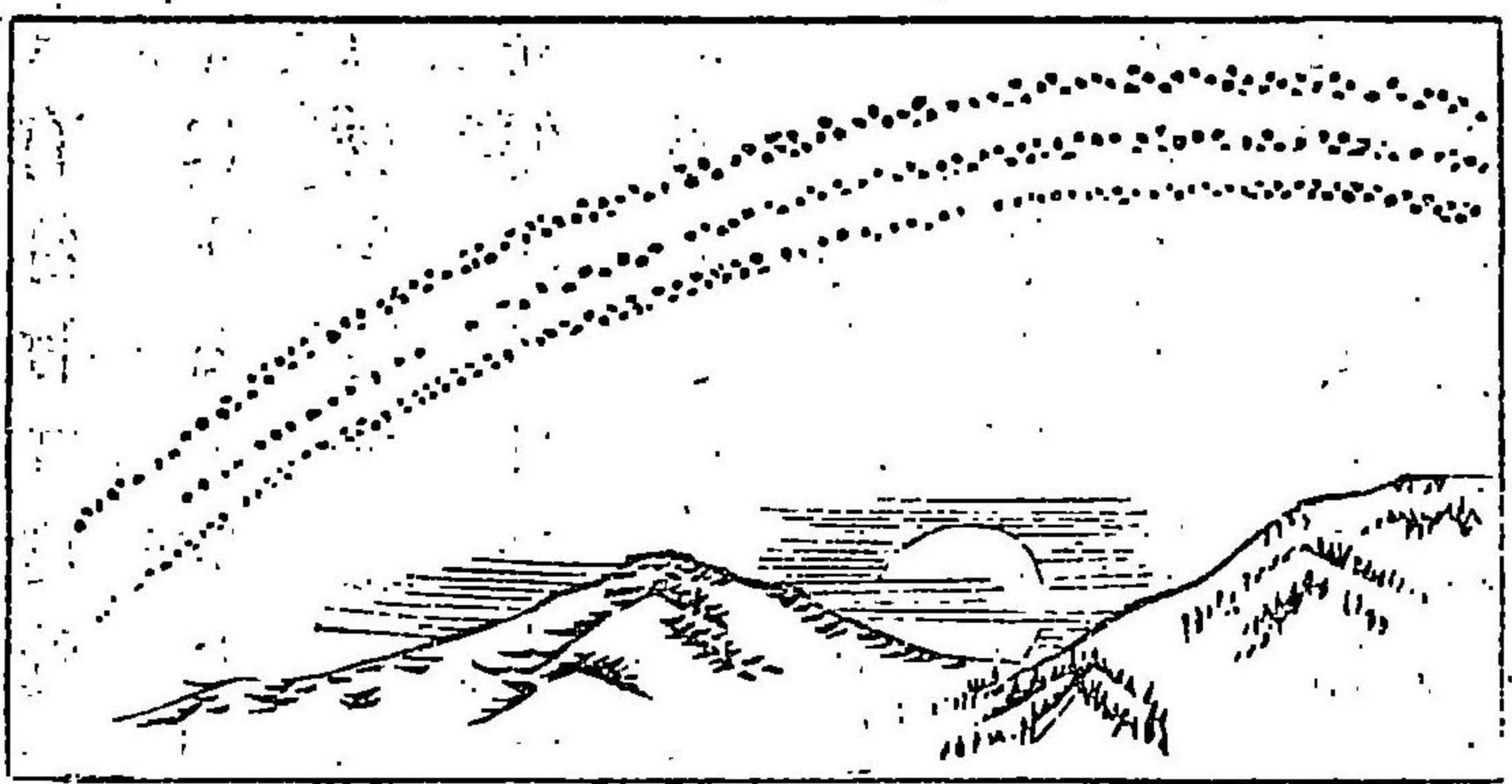
響ひびの話

今大鼓おほなこを取とり、之これを打うては、「ドン」といひ、鐘かねを打うては、「ガン」といひ、おれを響ひびと名なづく、是これは何故ゆゑと尋たづぬるに、大鼓おほなこや鐘かねの振ふるひうごくあまり周めぐりにある空くう氣きを動うごかすおれ空くう氣きを送まりて、耳みみに達たするなり、○

其有様そのありさまは、丁度池ていどいけの中なかに石いしを投なげ入いるれば、四方しほうに波なみを生せいじ、岸きしによるると同じ理ことなり、○又響ひびに、大小たいせうと強つよきと弱よわきとあるは、響ひびを發はつするもの、彈力だんりきに強つよきと弱よわきとあるに因よる、○響ひびを傳つたふるは、唯空氣ただくうきばかりにてはなく、水みづ又木またき、土つち等らうもよく傳つたふるものにて、若もし人水ひとみづ中なかにて、鐘かねを打うち、一人遠ひととほくまあり、水みづに耳みみを附つけ、聞きくとき、地ち上じやうよて聞きくより大だいなり、又材木またざいぼくの一端いっぽうを搔かき、他たの端はに耳みみを着つけ、聞きけば大おほいなる音おとを聞きく、又地ち上じやうに耳みみを附つくれは、遠とほくより來きたる人ひとや馬うまの足音あしおとを聞きく、これ皆みなよく音おとを傳つたふる證據しやうこなり、

色いろと虹にじの話





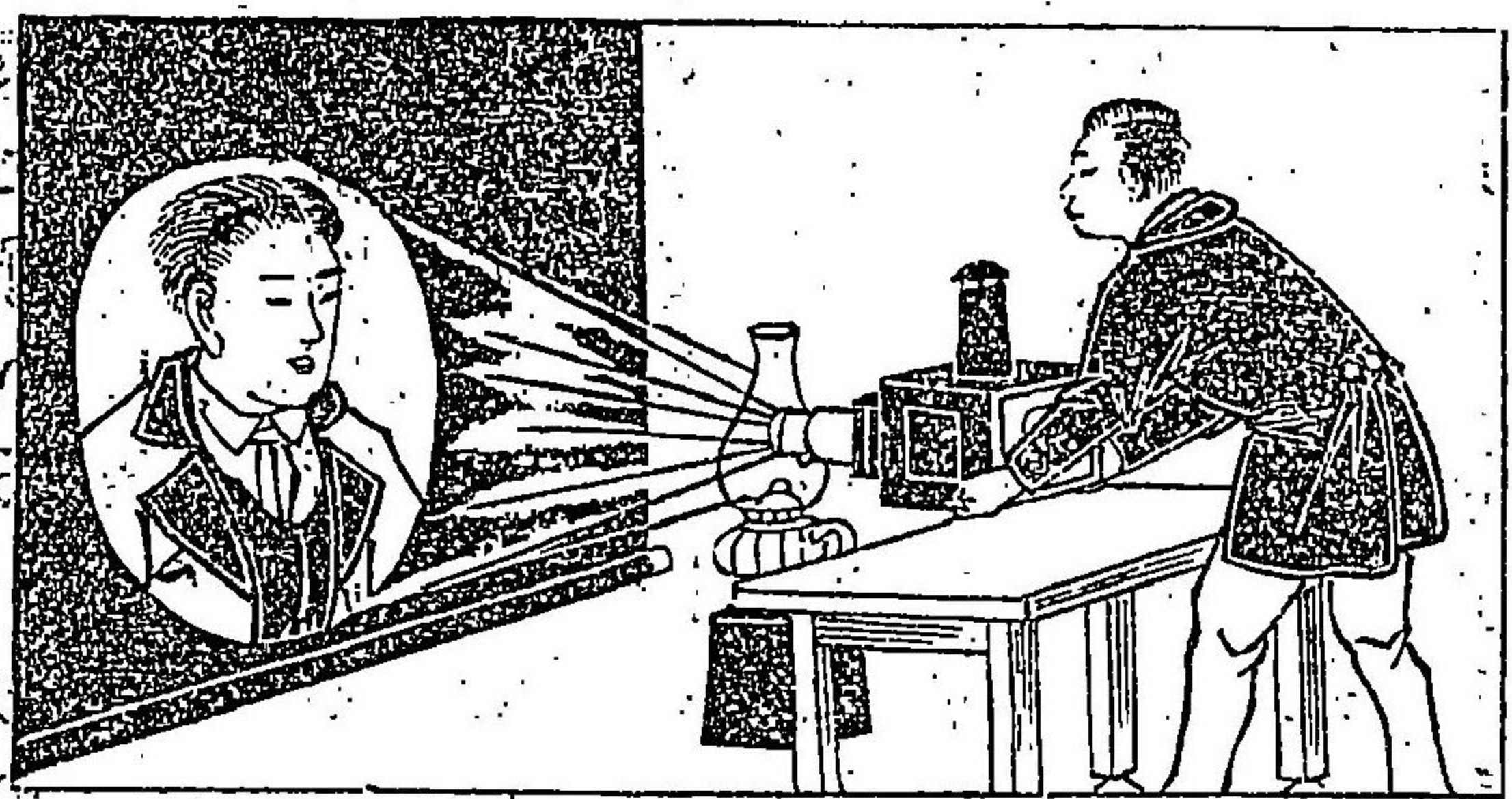
草木の花或ハ果物等に赤きあり、紅なる  
 あり、黄なるありて、種々美しきものは何  
 故なりといへば、太陽の光線には、紅、褐、黄、  
 緑、藍、紺、紫の七色ありて、此ものハ紅線を  
 吸ひ、彼ものハ黄線を吸ふの理より、各  
 異なる色を顯はすものなり。○太陽の七  
 色を見るにハ、三角硝子を光線に觸る、  
 れは明かに、七色をあらはす、又驟雨の時、  
 虹を顯はすも、此理による、虹は太陽に反  
 するものにして、朝は西に顯はれ、夕方の

東に顯へる、ものなり、

幻燈の話

今世間に行はる、幻燈といふものハ、小さいものを、大きくし  
 て見するものにして、其方法は、暗き室にて行ふなり。○其器  
 の装置は、左圖の如くにして、先づ馬口鏡杯の筐の内に、凹な  
 る鏡をイの部に置き、其前に洋燈を置く、これより反射する  
 光線は、其前に具へたる、口の凸鏡に落つ、又此に表裏とも、凸  
 面の鏡をハの部に置き、ウの硝子畫の部と遠く離し置き、前  
 の方に幕を張れば、硝子板に畫ける、圖形の大なる影像を幕  
 に現はし、奇なる眞形をなすなり。○硝子畫を傍より廻ら





或は抜きさしすれば、形を動し又は地球の動く有様又潮の満干杯を明に示すを  
 を得る、真物の如く見ゆるものなり、  
 我國に於て、昔より小兒の玩びものなる  
 一種の映し繪と稱ふるものあり、此もの  
 幻燈の理にたかふたるよし、然れども、  
 此等は器械製造の粗なるを以て、目今  
 の如く學問の進みて、精細の理を極めた  
 るにあらざるゆゑに、一奇觀を現すに足  
 らざりしあり、

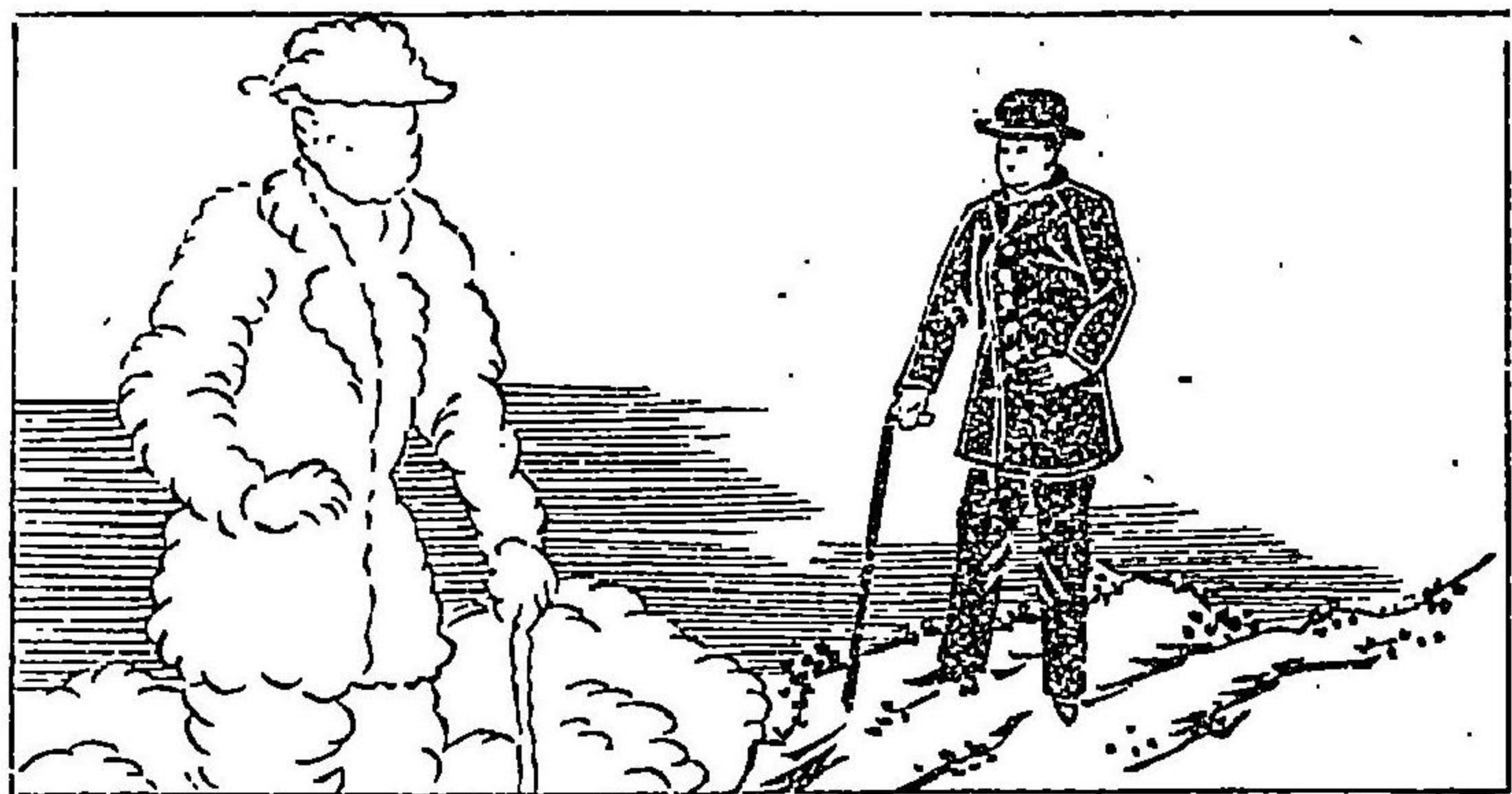
幻燈の像を大にするには、影像の鏡より隔つよし、百倍なる  
 ときは、其像百倍となるなり、

水蒸氣 雲 霧 雨 雪の話

水蒸氣、河海湖沼等の水、太陽の熱を受けて、常に蒸じ昇るよ  
 しの、鐵瓶に湯を沸かせは、火熱のため、湯氣となりて、昇る  
 と同じ理にして、輕き氣となり、目に見えざれども、熱を失  
 ふときは、縮みて雲となり、霧となり、尙冷ゆるときは、雨とな  
 るなり、  
 雲は、水蒸氣の高く空中に上り、熱を失ひたるものにして、煙  
 の如く見ゆるなり、又霧の雲と同じく、水蒸氣の熱を失ひた



るものなれども唯低く地上にあるの差ひのみ霧も遠くよ  
 り之を望めは雲と異あることなし  
 雨は元水蒸氣の空中に上り尙ほ冷氣に遇ひ更に熱を失ひ  
 漸く縮みて水滴となり降るものをいふ  
 雪は水蒸氣の空中に昇りたるもの烈とき寒冷に遇ひて凍  
 りて白き片となり降るあり  
 雲霧に物の映ずる話  
 曾て或る人高き山に登り足を止めて南西の方を望みしに  
 遙に身の長け一丈餘りもあらんと思ほるとき大なる人立ち  
 居れり其時風吹き來りて帽子を吹き落されんとせしによ



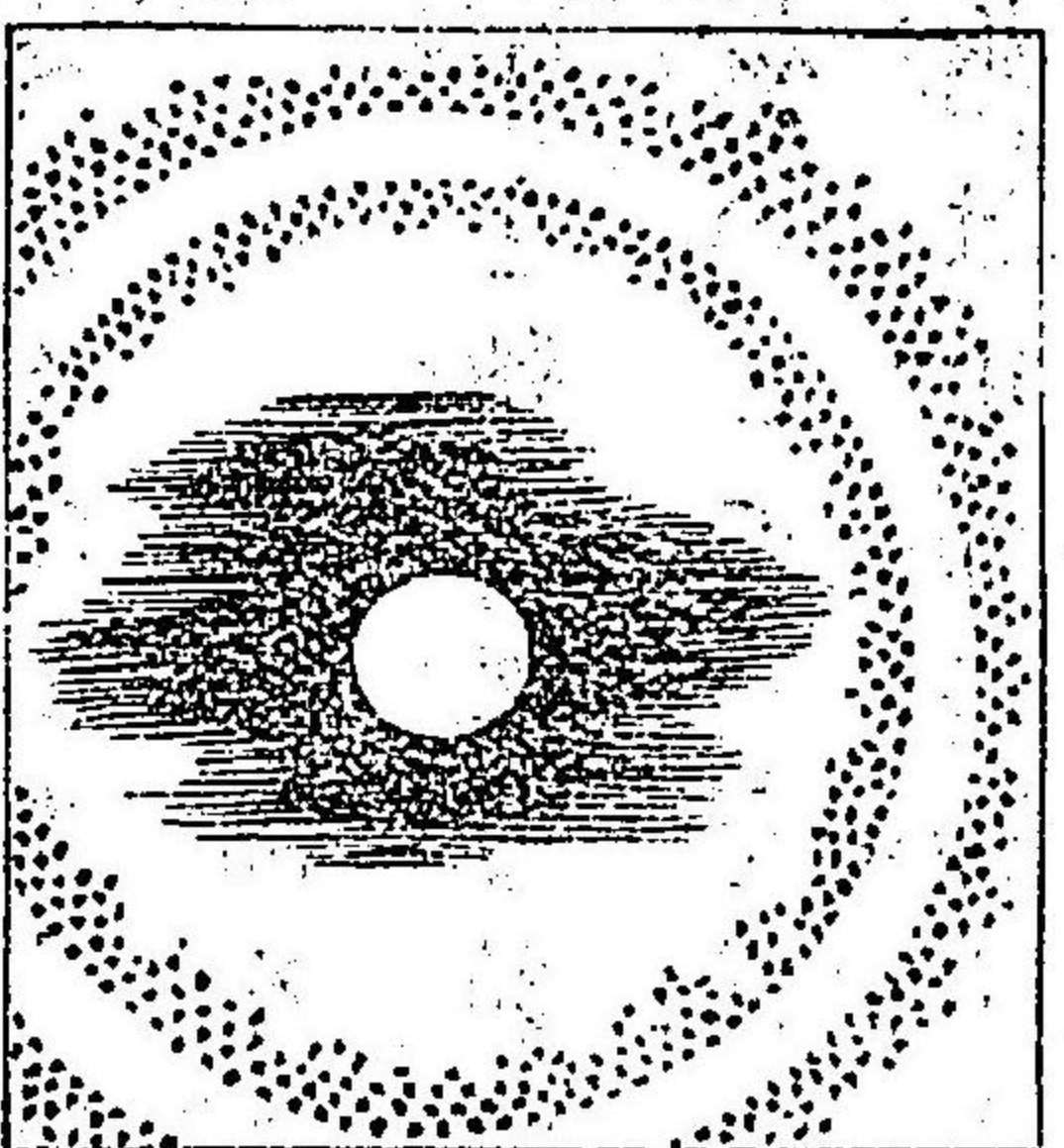
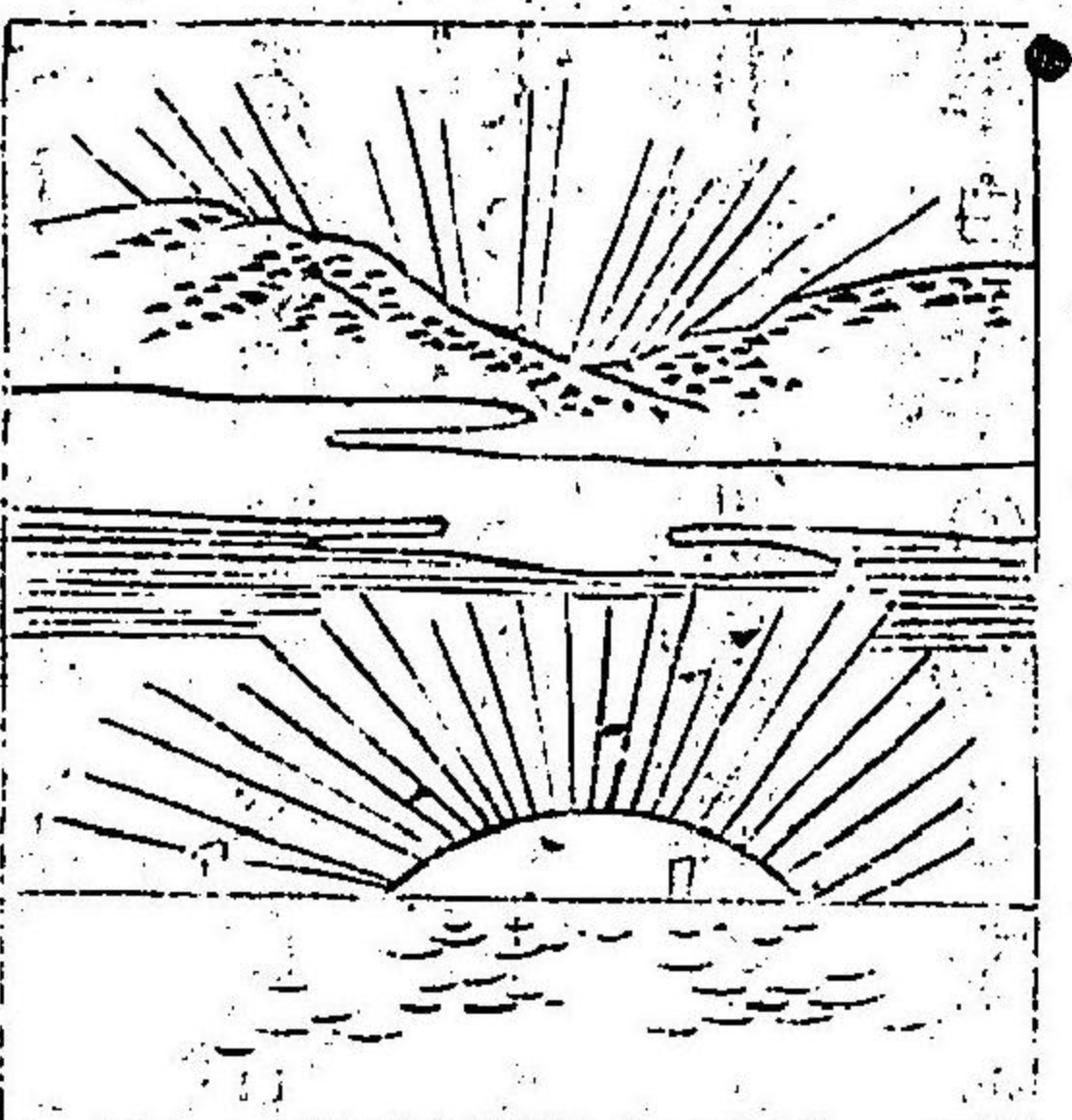
り頭に手をあげて帽子を押へしに彼人  
 も同じく手を頭へあげて帽子を押へた  
 り其時彼人に禮をあさんと腰を屈めし  
 に彼もまた同じく腰を屈めて禮を返す  
 に似たり其人不思議に思ひ急ぎて山を  
 下りて同伴を呼び來りてこれを見るに  
 今度は二人の大なる人を見る故に二人  
 は愈不思議に思ひ種々の形を爲せしに  
 彼も亦同じ形をなせりと是他なと雲霧  
 は其前面にある物體の影反射するもの



なるに因り、二人の像の雲霧中に映りとなり、○此顯像は大陽の昇らんとするとき或ハ没せんとするとき山上に浮ぶ雲光線を射るときに此光線と雲との中間に人の在るときは、人の影は彼方の雲に映りて顯る、なり丁度壁の影を受るが如く、此方にて動けは、彼方にても同小容を爲すなり○我國昔より富士山其他の高山に登り富士權現の來降其他神佛の來降などを唱ふるものは、皆自己の體の雲霧に映るを見るなり迷へるといふべし、

日の重出 日月の暈の話

日月の數個出で、又は日の暈、月の暈などの如きも、皆光線の



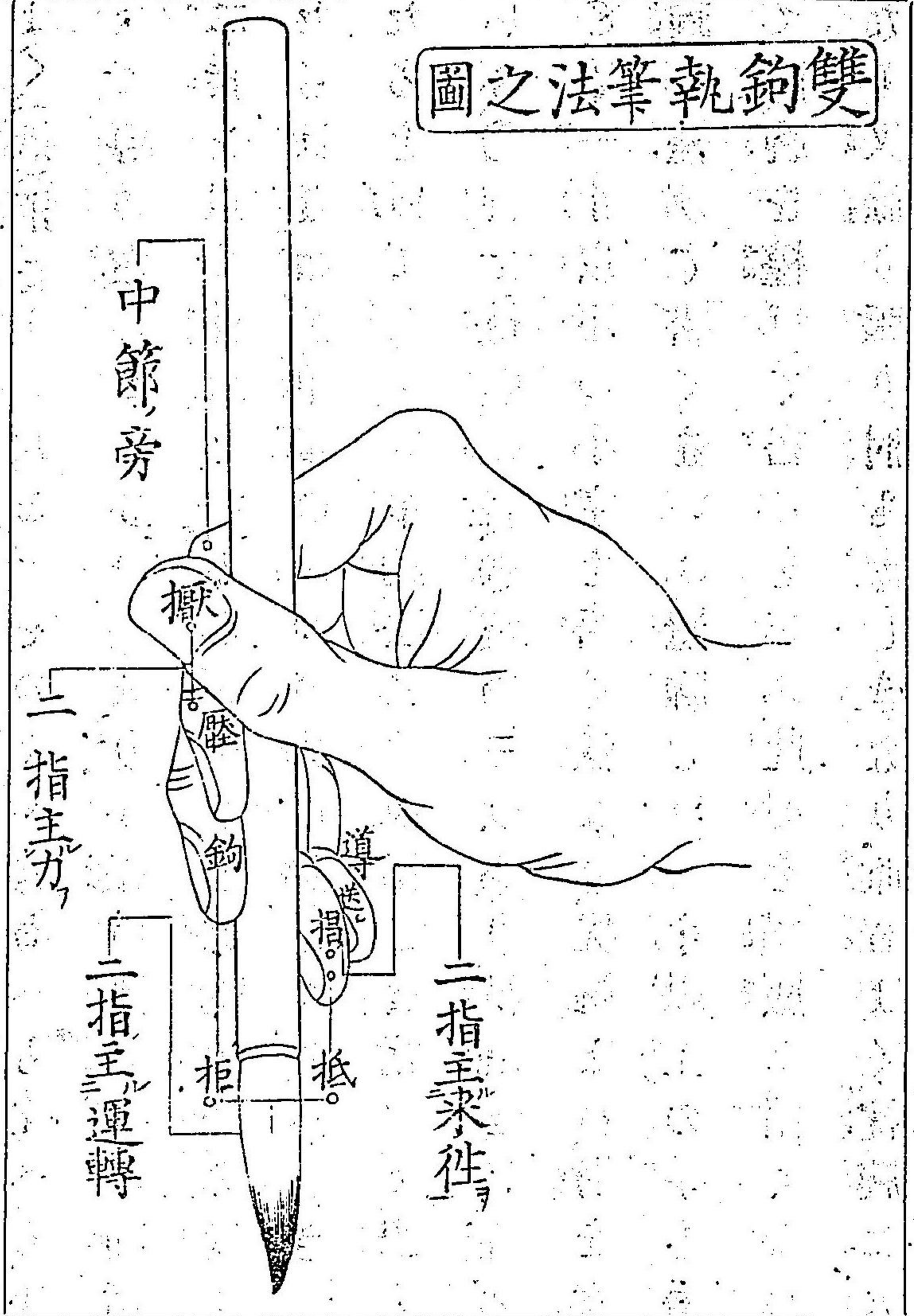
水蒸氣を含みたる大氣中に來り折れて、反射するに因る能く晴れたる夜、月の周りに大なる輪を繞らすことあり、又日の周にも大なる輪を繞らすことあり、之を暈といふ、おれハ空氣の中に水蒸氣を含むおと多く、透明とならざるゆゑ、日月の像を映まなり、雨ふるの徴とす、又日月の數個出ることあるは、空氣中の水蒸氣凝り結びて、鏡の如くなり、日月の像を、此中に照と映すに因るものよして、少も怪む



べきものふあらず、  
筆を執る法の事

筆を執るに、雙鉤執筆法といふあり、(厭)即大指はその上節の腹のところを筆に着け、十分に直なる様になすべし、(壓)即食指は、中節の横のところ、管をつくべし、此指にて筆を保つべし、(鉤)即中指ハ、その指先の腹にて筆を下の方に押へつくる様になすべし、(掲)即無名指ハ、肉と爪との際を着けて、筆を上の方へはね上るやうになすべし、斯くの如くなすとさり、中指と無名指とこかと釣り合ひて、(拒)(抵)を爲し、上、下、左、右、運筆自在の働きをなすものなり、故に(抵)と(拒)の二指は、運轉を

雙鉤執筆法之圖



主るといへり、(送)と(導)といふ小指の役に、(拒)と(抵)にて、無名指にてつりあひ



よく(抵拒)をあたたるを、そのまゝ、に右へも左へも、小指の働  
 にて導き送ることありつまり、小指ハ無名指の助指にて、此  
 二指を以て、往來を主るといへり、○此執筆法を、雙鉤と名け  
 たるは、食指と中指の二つの指、相並びたるありさま、釣に似  
 たるを以てなり、○單鉤法とは、拇指と食指にて筆を執るを  
 いふ、○腕に枕腕、提腕、懸腕の三法あり、枕腕とは、左の手を枕  
 とし、一寸以下の小字を書く法なり、提腕といふ、肘を案し、附  
 腕を擡げて書くをいふ、懸腕といふ、一寸以上の字を書く法に  
 て、肘腕を擡げて書くをいふ、此肘を横腹より附くるは、悪しき  
 なり、又餘り張り、肘も悪しきなり、唯程よく、枕腕にならる

楠正成仁恕の話

肘を、そのまゝ、もたせれば、法に協ふと知るへし、  
 楠正成、京都より、河内に歸る途中にて、盜を捕らへ行くもの  
 に逢ふ、正成、何者なるやと問へば、吏ハ河内平岡の民にして、  
 馬を盜みと者なりと答ふ、正成、囚人に向ひ、汝ハ何故に馬を  
 盜みとやと問ふに、囚人ハ、涙を流し、母老いて病に臥す、醫に  
 療治を乞ひ、に醫ハ米二石を與へば、之を全治せしめんと  
 いへるゆゑ、相約して、藥を受け、漸く癒へしとき、醫ハ米を請  
 ふと頻りなり、されども、家貧にして、與ふるおと能はず、醫  
 怒りて、後藥を授けず、故に親と、友に乞ひ、一石を借りて、之



を贈るに醫聽かず依りて已むを得ず馬を盗みて之を賣り、  
 米三石を得一石を醫に贈りて老母の藥を得一石を親友に  
 返したるに程なく馬主に搜り索められて捕縛せられんと  
 答へたり正成尙ほ其事實を檢せんと其言の如き又其貧窮  
 に至りて所以を糺せしに彼れ脚を病むこと半年許にして  
 農業を營むよと能はず故に此に至りとなりと正成乃ち之  
 を判決し馬を本主に返し且米五石を加へて之を償ひ穀五  
 石を以て馬を買ひしものよ與へ囚人を赦し其孝に感し米  
 十石を與ふ而して令て曰く汝母の爲めに物を盗む故に  
 我が裁斷すること斯れ如し然れども盜竊の罪ハ懲さざる



可からず我れ法の爲めに汝の小舎を燒  
 き壞すべし汝今與ふる所の米を以て新  
 に田宅を求めて老母を養ふべしと醫は  
 貪りて仁術に違ふとあし之を他邦に放  
 逐せりといふ又郡司の宇佐美氏を責め  
 て曰く汝治民に怠り貧者を救ふ能はず  
 病者を憐まず其弊此に至る然れども汝  
 の罪にあらず正成の罪ありと其人を責  
 むるの薄くして身を責むるの厚き此の  
 如きハ賢哲も難しとする所にして正成



よして、よく之を爲す、實に俊傑の俊傑ある所以なり、  
能く働くもの、能く楽しむ

昔、東京四谷に住む、飴屋忠七といふものあり、朝は疾く起き  
出で、飴を拵へ、家業怠りなく、少しの隙をも惜み、三度の食  
事の外の、更に休むおとなく、日暮より仕舞ひて、風呂に入り、



去より破れたる、古き麤服を脱ぎ、すて、黒  
羽二重に、定紋の付きたる、衣服に着換へ、  
黒天鵞絨の褥の上に坐し、煙艸を吸ひ、杯  
して、床に入る、夜具も、純子の類にて、之を  
着て臥す、夜明けぬれば、又例の通り、古び

たる破れ服を着して、飴を作るおと、一日も怠るおとなし、人  
其意を問ひければ、忠七答へていへるやう、凡そ人といふも  
の、わ、日々、己れが、渡世にのみ、心を勞して慰む仕方なし、假令  
いかなる樂をあすとも、其内に利を得んと、思ふ心の離る、  
時あければ、心を慰むる、夜眠りたるうち、はかり、誠の樂み  
なり、故ふ我、此の如くして、性を養ふといひ、とす、此人は  
生涯、過度の樂をなさず、樂を程よくして、齡八十餘にて、目  
出度世を終へしとぞ、汝等も、此等の事、心を留め怠らず、よ  
く、勉めて、樂まんことを、思ふべし、  
秀吉約束を重じたる話



豊臣秀吉、織田信長に事へしとき、墨股城に居たりしに、信長の爲めに、濃州宇留馬の城主ある、大澤次郎左衛門を説き降し、おれを携へて、信長に謁せしめたり、然るに、信長密に秀吉を招き、彼大澤のものと齋藤龍興の無二の味方なれば、今我れに降るとも、後再び異心を生ずること計る可らず、寧ろ之を欺きて、殺す如かずといひければ、秀吉之に答へて、今日彼をゆるし給は、後また來り降るもの多かるべし、若し彼を殺し給は、是よりして來り降る者ならん、然る時の臣が彼を説き降したるの微功も、水の泡となり申さん、願くは枉げて、彼一人の生命を宥と給はれと言ひければ、信長終つ



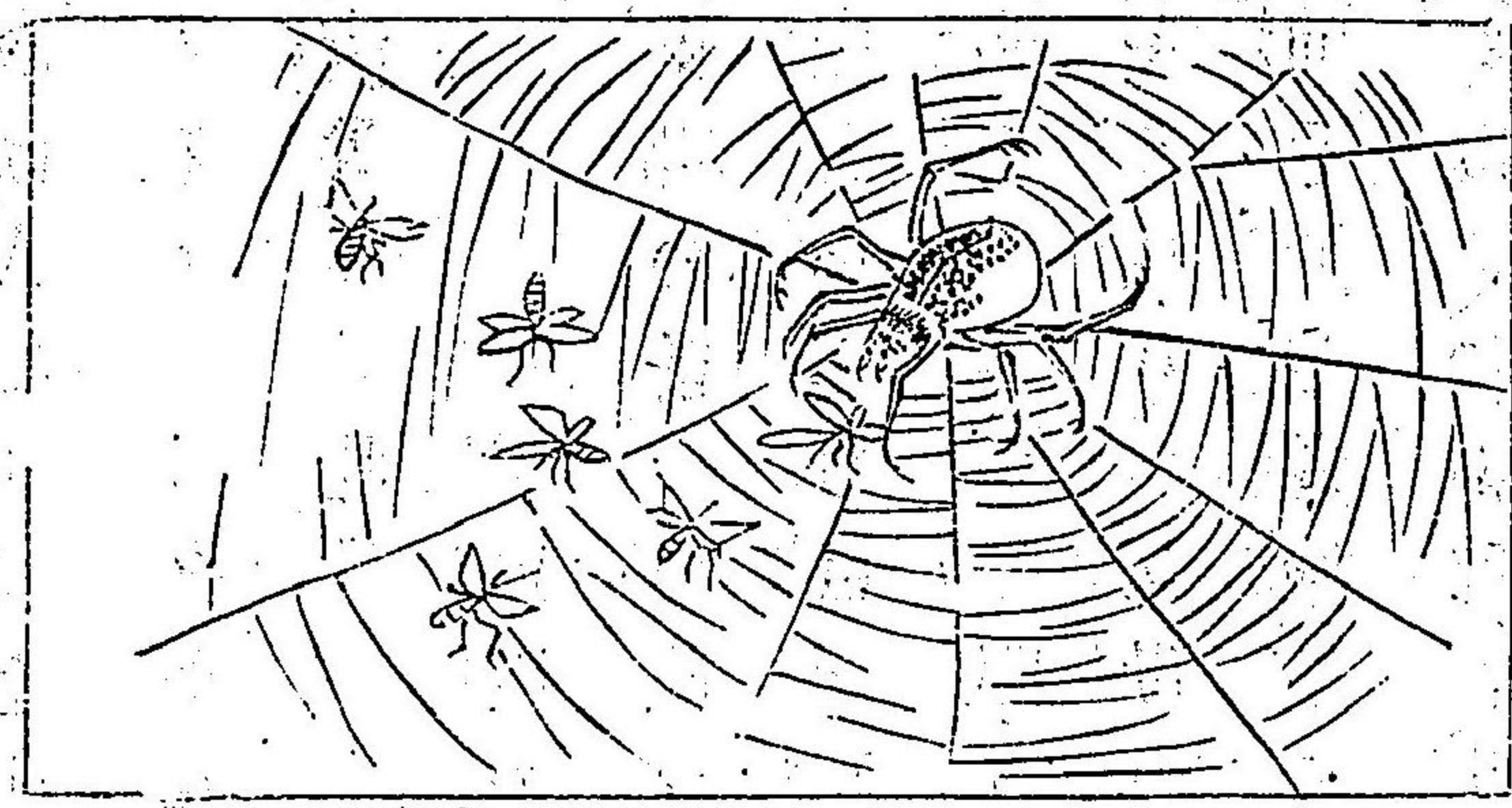
聽かざりければ、秀吉の已むを得ず、舍に歸り、密に大澤を招きて、汝が言を信じて、此に來りたれども、災厄今將さに至らんとす、我汝を脱せしめん、欲するに由り、汝は我を質として、早く此場を逃れ去るべしと言ひて、自ら佩刀を脱ぎ、其爲す所に任せける、大澤の之を聞き、心に其信義を謝し、乃ち刀を抜き、秀吉に擬し、逃れて宇留馬の城に入り、秀吉も亦墨股の城に歸りたるが是事よりして、秀吉の約を守



り、信を立つるおと、世に聞え、遠近其風采を慕ふもの頗る多  
きに至り、といふ、人は約を守り、信を立るを以て、第一とす、  
汝等よく之を思へ、

蚊と蜘蛛の話

夏の日、朝早く一疋の蚊十分の腹をふくらと、辛くして、蚊帳  
を脱け出で、戸の外に飛び去らんとするとき、忽ち擔下の蜘蛛  
の巣にかゝり、蚊は大に驚き逃れんとて身をもがけ、尚  
ほく、絲に縛められ、もはや進退きまりければ、大聲を揚  
げて、哀れ蜘蛛殿、貴殿の慈悲の心を以て、某の一命を助け給  
はれと、叫びけり、蜘蛛は善き獲物ありと、心ふ喜び舌打とつ



、其様子を窺ひ居たりしが、此時遙か彼  
方より、絲をたぐり來りて、蚊に向ひ言ひ  
ける様、其元は昨夜より今朝まで、あくま  
で甘き物を貪り食ひ、さを愉快に候ひし  
ならん、夫れ驕る者は、久しからず貪るも  
のは、必ず敗る若し其方の腹中に甘き物  
の蓄なかりせば、我其一命は助くべきも  
のをと言ひも畢らず、蚊の體に噛みつき  
見るがうちに、其全身に満ちたる血汁を  
啜り盡しけるといへり、人の血を絞るも



のは、人に其肉を食はるといふとあり、人をうさふひ己を利するものは、又他に己を害するものあるは、當然の理なれば、汝等、よく此等の事に、心をつくべきなり、

孝子忠臣の話

支那の前漢の世に、王陽といへる人あり、益州といふ處の刺史といふ役目を奉けて、多くの從者を携へて、功葉山の九折阪と稱ふる、險阻なる坂路にかゝりしとき、王陽嘆じて言ふやう、我れの父母の遺骸を承け、我骸にして、我骸にあらず、如何ぞ斯る危険ある山道を、屢々往來まべけんやとて、終に病を以て、職を辭し、其地を去りたりといふ、其後王尊といへる



人あり、また刺史となり、九折阪に至り、小吏に向ひ、王陽の畏れたりといふ、山道の、此處なるものと問ひければ、吏は然りと答へける、王尊一聲、馭者を叱して曰く、疾く驅けよ、王陽の孝子あり、王尊は忠臣あり、忠臣の國家の爲めに、艱難危険を辭せずといひしとぞ、王陽の辭して、孝を全うし、王尊の險をふみて、忠を全うせりといふべし、汝等、よく慎みて、危険の事を爲し、身軀を損ふと勿れ、然れども、國家の爲め



に生命を惜まざることあるべし。

エパミノンダス死に臨みて尙ほ國を憂ふ

昔希臘列國中にて、ゼーブ及びスパルタの二國は、最も勢力ある國なりしが、互に其國勢を張り、其雄を争ふより、動もすれバ、葛藤を生じ、結びて解けざる有様なり、戦争常に絶ゆる間としてハ、あかりける、然るに、ゼーブに一人の英傑あり、其名をエパミノンダスといふ、忠勇にして、事、當り驚かず、仁愛の性能く、其國民を保育し、且つ智あり、學あり、力を盡して其國事を賛げければ、其名四方に轟きて、エパミノンダスがゼーブの總大將たりと間は、絶えて、ゼーブを悔るものあか



りともぞ、さるほごにスパルタの益とゼーブと怨を重ね、遂にエパミノンダスが最後の一大戦争を、マンケニアニ於て、開く。と、はかりにけり、此一戦ハエパミノンダス戦死したりと雖も、其死は、實にゼーブの大勝利を買ひ得たることにてありけり、アンチニアの役、兩軍亂戦中スパルタ人の發したる投矢、飛び來りて、忽ちエパミノンダスの胸部に中り、スパルタ人ハ之を見て、いでや敵將の首、打ち取



らんと、先を争ひて進み、ゼーブの軍は大將を救ひ出せど、一  
 齊に進み寄り兩國の軍兵負傷したるエパミノンダスを圍  
 み、水火になりて烈しく接戦したりしが、ゼーブ人の鋒先銃  
 くして、スパータ人を追ひ退け、大將を肩に荷ひて、其陣營に  
 救ひ歸ることを得たり、斯くて、エパミノンダスの傷を檢  
 るに、投矢は深く胸部に留り、若し之を抜き出すときは、即時  
 ふ其命も覺束なことを、軍醫も眉をひろめけるが、エパミノン  
 ダスは床上に横に臥し、一身の傷は敢て意とせず、其痛苦は  
 左まで感せざるもの、如く唯だ一意に、國家の爲めに此戰  
 争の孰れに勝利の歸するやらんと、氣遣ひて居たりける、斯

る折しも戰場より一人の使者驅け來り大將の前に進みて、  
 スパータは敗軍せり、ゼーブの大勝利なりと叫びければ、エ  
 パミノンダスの之を聞き欣然として曰く、斯の如くんバ即  
 ち可なりといひも畢らず自ら矢を胸部より抜き出さける  
 が、其儘息は絶えにける、時に西曆紀元前三百六十三年なり、



明治廿年四月十四日版權免許  
同 七月 出版

(定價金七錢)

編輯人

萩原 藤吉

日本橋區濱町二丁目  
十七番地寄留

出版人

法木 德兵衛

東京府平民  
日本橋區元大坂町  
十一番地

發兌人

水野 慶二郎

日本橋區通油町  
十八番地

### 教育雜誌記事改良廣告

教育雜誌ハ七月第三十九號より紙面に大改良を加ふべし其目的は記事稍々昇近を離れて高遠に赴くに在り全く陳腐を却けて斬新を迎ふるに在り今左に其部門の大略を掲かく翼くは江湖の誹客幸に愛讀の榮を賜へ

- 學藝 ○史傳 ○論說 ○批評 ○雜記
- 小説 ○詞花 ○鈔錄 ○計表 ○問答
- 寄書 ○時報 ○歐文 ○廣告

右の如く誌上の面目を一新し從來の學校教科に類するが如きものは第三拾八號にて悉く完結し爾后編輯の義一層勉強仕候間幸に御注文仰付被下度候○本誌一冊金十錢遞送料一錢或ハ二錢

發行所 府下北豊島郡金杉村 贊育社  
二百六十三番地  
發賣所 同日本橋區元大坂町 勸學社  
拾一番地寄留

### ○男女勸學新誌改題廣告

右は今回誌 繪入勸學新聞 板の改め名  
事を改題し 加ひ文章は通俗を旨とし全國高等學校より中學校小學校  
の教員諸君の參考に供し次には生徒諸士の正課を助くるの  
主意を以て各部門を設け近日發刊仕候間江湖の學者幸に購  
讀あらんとを

發行所	日本橋區元大坂町	勸學社
智惠の苧環	金六錢	
小兒の世界	金六錢五厘	
生徒の智囊	金六錢	
學びの海	金七錢	

右は小學校生徒の正課の力を助くる爲に編輯したるものにして通常動植物を掲げ一々之に画を加ひ單なる説明を附し庶物作の模範を示し逐次實物談より戶外遊戯の方法を記し物理談歴史談修身談を簡易に説きたる小學生徒の玩物には適當の頁書なり尚此類の書は追々に發兌仕れば幸に御愛顧を願ふ



F-28

大日本教育會館  
一三  
一號  
架  
函



9



学の海

萩原藤吉

国立国会図書館

052917-000-3

特49-561

学の海

萩原 藤吉/編

M20

CAA-0276



特  
5



